

おかあさんのつうしんば

宮川ひろ作 伊勢英子絵





子どもの文学

おかあさんのつうしんぼ

NDC・913 偕成社 182p. 23cm 1979年

1979年1月 1刷

1979年12月 11刷

著 者	^{みや} 宮 ^{かわ} 川 ひ ろ
発行者	今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260—3221 (代) 〒162

振替 東京5—1352番

印 刷 新興印刷製本株式会社
製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-626270-0904

Printed in Japan

©宮川ひろ 伊勢英子 1978

おかあさんのつうしんぽ

宮川ひろ作 伊勢英子絵



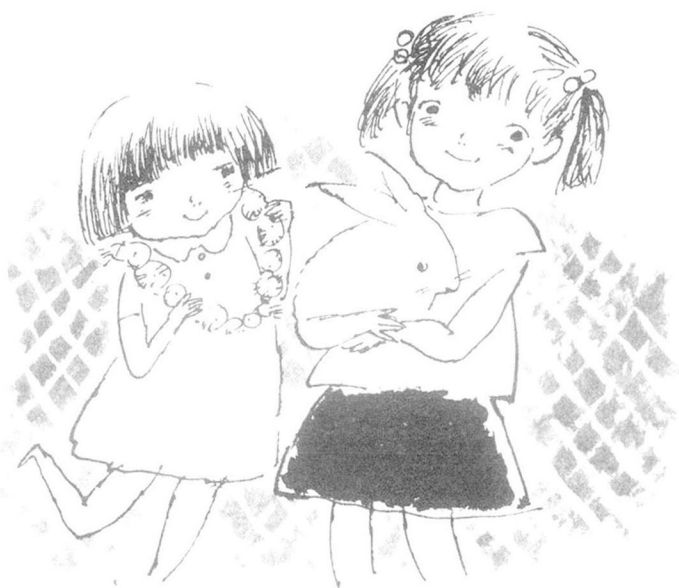
● はじめに

「有波先生は、つごうで休みです。」
ありなみ

校長先生は、そうつけたしました。
こうちょう

つごうって、なんだろう。

三年生になって、きのうとはちがった、なにかがはじまる日なのに、先生がお休みだなんて、がっかりです。
ところが……。



おかあさんのつうしんぼ／もくじ

1 有波先生ありなみがいない 8

2 きょうだい先生 15

3 岩上いわがみくんのおばあちゃん 26

4 おかあさん 35



15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	
あとがき	さかさま つうしんぼ	コマツナ パーティ	家庭訪問 かていほうもん	わらいむすび	橋本くん はしもと	けっこん式 しき	いい日	家族 かぞく	給食 きゅうく	けんちん汁 じゅ	夕子とマキちゃん ゆうこ
182		154	143	129	120	106	93	80	70	60	46
166											





作者・宮川 ^{みやかわ}ひろ

群馬県に生まれる。金華学園卒業後、小学校に勤める。新日本童話教室、びわの実学校に学ぶ。日本児童文学者協会会員。主な著書に『るすばん先生』『春駒のうた』『アーコも転校生』『四年三組のはた』『先生のつうしんぼ』『夜のかげぼうし』（赤い鳥文学賞）等多数がある。住所／東京都板橋区赤塚新町 2-13-20

画家・伊勢 ^{いせ}英子 ^{ひでこ}

札幌市に生まれる。東京芸術大学デザイン科を卒業。1972年より1年ほどフランスに遊学。現在、童画家倶楽部に所属。主な作品に『マドちゃんのだまのひみつ』『東京のおじぞうさま』『チョコレートにはりぼんをかけて』など。住所／東京都武蔵野市吉祥寺北町 4-2-3

おかあさんといっしょ

宮川ひろ



1 有波先生がいらない



「新三年生と、新五年生にもうしあげます。三年生は朝礼台のまえへ、五年生は、鉄棒のまえへ集合してください。これから組がえを発表します。」
そんな放送が、校庭いっぱいにながれました。

「いこう。」

「だれといっしょかしら。」

たのしみなような、心配なような気持ちで、夕子は朝礼台のほうへ走りました。

夕子の学校では、三年と五年で組がえがあります。受け持ちの先生もかわるのがふつうでした。

「はい、三組あつまって。」

手をあげたのは、一、二年と受け持ちだった白井先生です。三組というのは、去年の二年三組のことでした。

「いまから、名まえをよぶ人は、三年一組ですよ。よこへでて一列にならんでください。

岩上康之くん、金子直司くん……。

つぎは、女の人ですよ。小林貴子さん、田丸美佐ちゃん、千葉夕子さん……」

夕子は、田丸さんとまたいっしょの組になりました。

田丸さんは、一年のときから、ただの一回も給食をたべたことのない人です。だれとも話さないし、白井先生とだって、話したことはありません。先生から話しかけられると、首をたてにふったり、よこにふったりしてこたえました。それが、夕子とだけは話しました。家がちかいし、小さいときから、いつでもいっしょで、きょうだいのようにして大きくなりました。

組がえがおわると、白井先生は夕子のかたをたたいて、

「田丸たまるさんのこと、たのむわね。」

と、小さい声でいいました。

「はい。」

夕子ゆうこも小さくへんじをしたけれど、ほんとうはすこしうんざりしていました。

一年のときも、二年のときも、夕子ゆうこはまるで田丸たまるさん係がかりでした。夕子にしかものをいわない、田丸さんのへんじをきいて、先生や友だちともにつたえるのも、夕子の役やくでした。

どうしてもたべようとはしない給食きゅうしょくを、たべるようにすすめたり、かたづけてあげるのも夕子ゆうこでした。三年になったら、田丸たまるさんとはべつの組になつて、のんびりしたかったのが、夕子のほんしんです。

それがまたいっしょの組だなんて、白井先生しらいは、わざとふたりをいっしょにしたのでしょうか。

田丸たまるさんが氣よわそうな目で、夕子を見ました。

「もう、知らない。」

夕子^{ゆうこ}は、田丸^{たまる}さんのそんな目をふりきるように、砂場^{すなば}のほうへかけだしました。

やがて始業式^{しぎようしき}がはじまりました。新三年生は三つの組から十二人ずつ、よりあつまったばかりですから、まだならぶじゅんじょもきまってはいません。

「三年と五年は、てきとうにならびなさい。」

看護当番^{かんごとうばん}の先生^{せんせい}が、号令台^{ごうれいだい}の上からいいました。夕子^{ゆうこ}は、知らん顔^{かお}をしているつもりだったのに、やっぱりかばうように、田丸^{たまる}さんのうしろにいました。

よその学校へかわっていった先生が、三人。そして、新しくはいってきた先生も、三人です。新しい先生のしょうかいがおわると、いよいよ、受け持ち^{うけもち}の先生の発表^{はつひょう}です。一年一組から、じゅんにすすんできました。先生の名まえが知らされるたびに、ならんでいる列^{れつ}がうごいて、おしゃべりがたかくなります。

「三年一組。」

校長先生^{こうちょうせんせい}は、いちだんと声を大きくして、そこでことばを切り^きりました。

(どの先生かしら。)

夕子は、どきどきしてきたむねの上に両手をあてて、校長先生のことばを待ちました。

「有波理恵先生。」

「よかったね。田丸さん。」

夕子は、田丸さんのかたに両手をかけて、思わずちよんちよんとはねていました。

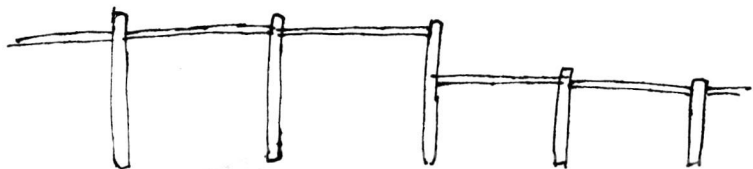
それでも田丸さんは、目をふせてじっとしたままです。

有波先生は、去年は四年生の受け持ちでした。去年の夏休みまえに、赤ちゃんをうんだ先生です。名まえをおぼえるのが、とてもじょうずな先生でした。よその組の子どもでも、むねの名ふだを見てはよんでくれます。

「名まえをおぼえたら、友だちよ。おおぜい友だちつくりましょうね。」

そういつて、ろうかですれちがうときでも、名まえをよんでくれました。

受け持ちの先生の名まえがよばれると、先生は、その組の列のまえに立ちました。でも、有波先生のすがたは、どこにも見えません。先生をさがすように、みんなの頭がうごきま



した。夕子^{ゆうこ}もせのびをして、右に左に頭^{あたま}をうごかしてさがしました。

「有波^{ありなみ}先生は、つごうできようはお休み^{やすみ}です。」

校長先生^{こうちょうせんせい}は、そうつけたしました。

「つごうって、なあに。」

「病氣^{びようき}かなあ。」

「赤ちゃんが、病氣かしら。」

小さいおしゃべりが、あっちにもこっちにもおこって、まえへもうしろへもうつつていきました。はじめての日に、受け持ち^{うけもち}の先生^{せんせい}がいないのは、やっぱりさびしいものです。

「三年二組、平山友里子^{ひらやまゆりこ}先生。」

受け持ち^{うけもち}の発表^{はつぴよう}はつづきました。

2 きょうだい先生



三年一組の教室は三階です。東がわのいちばんはしっこでした。

有波先生はお休みでも、とにかく教室へはいりました。席もきまってはいません。

「夕子ちゃん、いっしょにならぼ。」

さきに教室へはいった小林さんが、まどがわの机を二つおさえて、電車の席でもとるようによびました。

「ありがとう。」

夕子は、田丸さんを気にしながらも、走って行って、小林さんのとなりにすわりました。まどがわの席からは、運動場がよく見えました。サクラの下やジャンブルジムのあたりに